

リンゴわい化栽培向け優良大苗の生産・規格検定・流通技術の開発

1 中核機関・研究総括者

長野県果樹試験場 白田 彰

2 研究期間

2004 ~ 2008 年度（5 年間）

3 研究目的

リンゴのわい化栽培では、「カットツリー」等の大苗を利用することで一層の早期成園化と樹体のコンパクト化が可能と考えられ、優良大苗利用の定着が望まれている。このため、リンゴわい化栽培に対応した、超早期多収、高生産効率、低樹高化が可能で、輸送特性に優れる優良大苗の生産技術、苗木の充実度などの内部的な品質保証を考慮した品質規格と検定法、堀り上げ後の大苗の管理技術、安全な輸送システムの開発を行う。

4 研究内容及び実施体制

優良大苗の生産・利用技術の開発（長野県果樹試験場、（有）植木農園）

生産性の高い M.9 ガノ、JM7 台木と主要リンゴ品種、側枝の発生を促す植調剤を用いて、超早期多収で労働生産性が向上する優良大苗の養成・利用技術を開発、実証し、技術・管理マニュアルの作成を行う。

大苗の規格基準と規格検定法の開発（長野県果樹試験場、（有）植木農園）

これまでに開発された果樹の栄養診断技術を用いて、サイズばかりでなく内部品質も含めた規格基準の策定と簡易な検定技術の開発及びその実証とマニュアル化を行う。

優良大苗の流通技術の開発（長野県果樹試験場、全農長野、（有）植木農園）

各種輸送用資材の開発や貯蔵技術の研究実績を用いて、優良大苗の品質維持技術と専用コンテナによる安全な流通技術を開発し、管理マニュアルの作成及び流通システムのモデルを構築する。

5 目標とする成果

優良大苗の規格基準の策定、生産技術と流通体制の確立により、定植後 4 ~ 5 年で成園化し低樹高で省力効果が著しく高く、労働生産性が現状の 5 割上回るリンゴわい化栽培の普及が期待される。